

ゾウと一緒に

「ゾウと泳げる海がある」

以前からそんな話を聞いていて、少なからず興味を持っていた。

断片的に入手できる情報や映像では

複数の象たちが足のつかない海で

犬掻きのように足をゆっくり動かして泳いでいるものだった。

一度は撮影に行きたい。

その思いがかなう日がやってきた。

豪華クルーズ船・パヌニーヨットで行くアンダマン・ニコバル諸島クルーズ！

是非、参加してみてください！

「パヌニーヨットで行く未開の海シリーズ」

インド アンダマン・ニコバル諸島 クルーズ編

Photo&Text = Takaji Ochi, Yasuaki Kagii

Special thanks = World Tour Planners,
edive, Panunee Yacht

Design = PanariDesign

泳げる海



最後に残った、海中を泳ぐ象

01/ 茂みの中に食事に向うラジャン

02/ ダイバーたちに囲まれて海中を泳ぐ



象使いが、ラジャンの牙の上に乗ってバランスを取る

インドのアンダマン・ニコバル諸島。ここに、「海中を泳ぐ象」がいるという。そこに到着するまでは、上記したように、どんな象たちが、どのように海を泳ぐのかは、はっきりしていなかった。

しかし、到着して早々に、ナショナルジオグラフィックが、僕たちの予定していた、エレファントスイムと同じ日程で、象をチャーターして、1週間ほど撮影するという。要するにダブルブッキングの状態に陥り、僕らは日程の変更が可能かどうかなど、エージェントや象のオーナーとかなり長いこと、交渉することになってしまった。結果的には、こちらが日程変更して、ベストなコンディションの日に、象の体調もよくて、最高の状態での撮影が行えたからラッキーだったけど。

この交渉のときに、彼らから象の話を知ることができた。象の名前はラジャン。60歳になるオスのインド象だ。このラジャンを含め多くの象が、この地域で材木運

搬の仕事に従事していたようだ。ほとんどの象が寿命で亡くなったか、他の地域に移されて、今では海で泳げる象は、この年老いたラジャンだけだという。つまり、海に入るのは野生の象ではないということ。

見と確認も兼ねて、エレファントスイム当日の早朝、「海中を泳ぐ象」の住む、ハブロックアイランドに上陸した。そして、密林の中で静かに水浴びしていたラジャンに出会った。象使いが促すままに、彼は泳ぎする前の腹ごしらえのために、藪の中へと姿を消した。



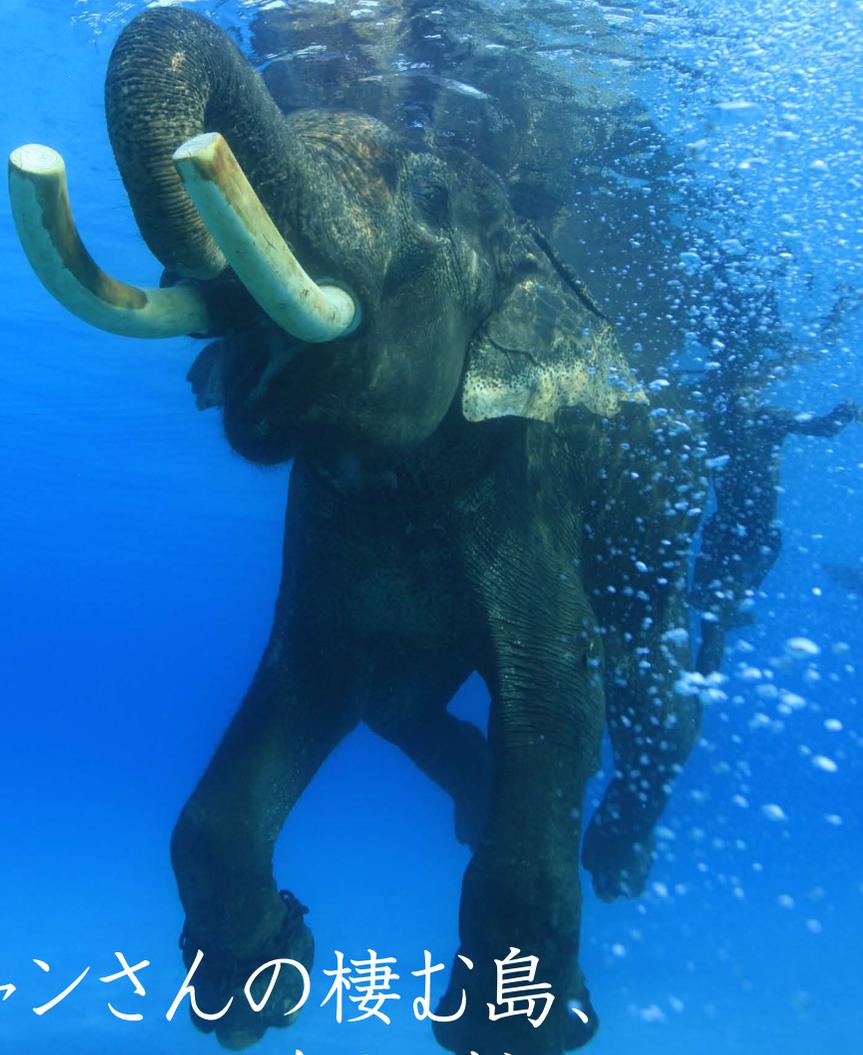
いよいよエレファントスイムの始まりだ。



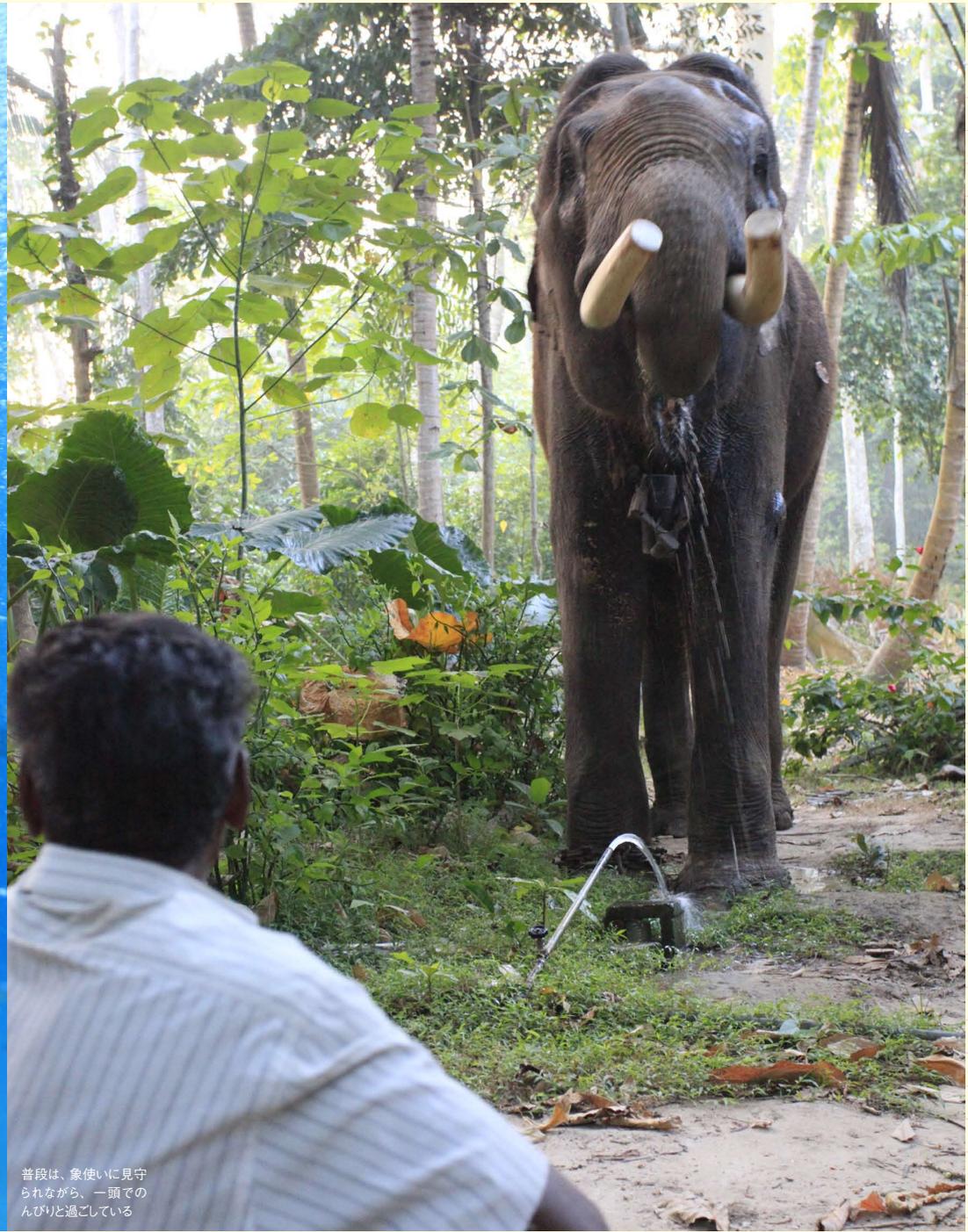
泳ぐ前に、島の中で遭った老象



犬かきしながら、時々鼻
を海面に出して、上手
に泳ぐラジャン



ラジャンさんの棲む島、 ハブロックアイランド



普段は、象使いに見守
られながら、一頭での
んびりと過ごしている



©WEB-LUE ウェブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

ゾウと一緒に泳げる海
[パヌニーヨットで行くインド、アンダマン・ニコバル諸島 クルーズ編]
Web-lue 2010. Summer



Information Link
<http://www.wfp.co.jp/area/andaman>
http://www.edivekhaolak.com/cru_andaman.html

← 関連情報HPへ



不思議な感覚になる エレファントスイムの光景

「海中を泳ぐ象」の住む、ハブロック島 (Havelock Island) に到着。朝7時過ぎから、エレファントダイブの用意を開始する。いつも通りにダイビングへ行く準備をして、クルーズ船からディンギーに乗り込み、白砂の美しい海岸線まで向かう。

島に近づくと浅瀬に降り立ち、腰まで海の中に入った状態でラジャンを待つ。ポイントはゾウを撮影し易いように、太陽を背にして、一列で並ぶ。そうしているうちに、島の緑からラジャンが現れ、ゾウ使いに先導されて、ゆっくりと海の中に入って来る。

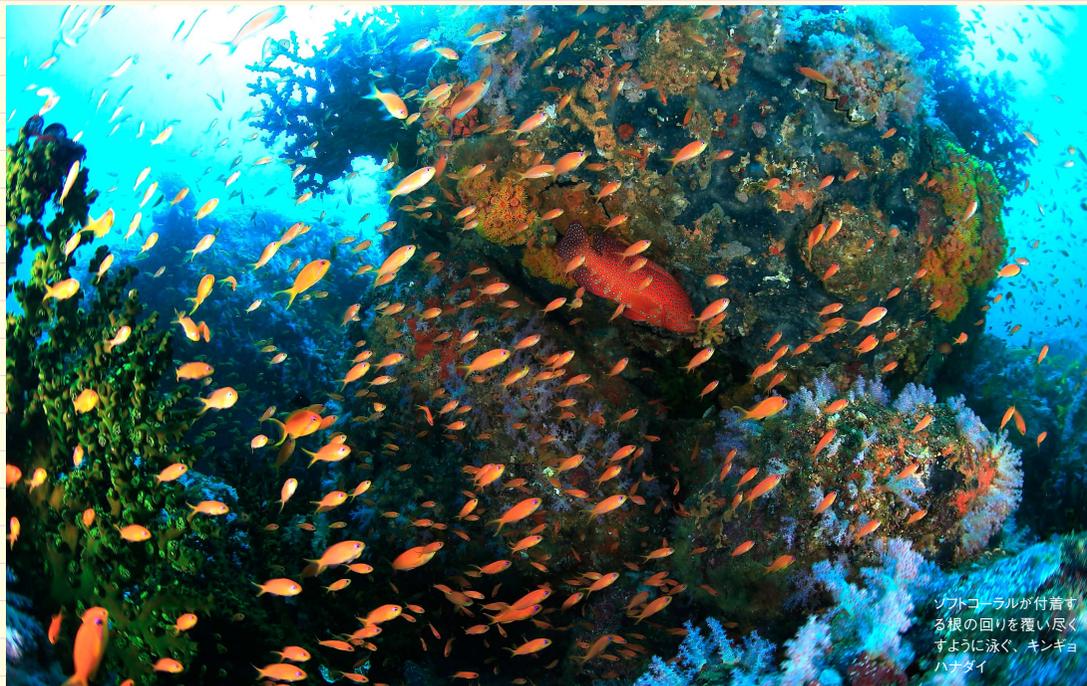
ラジャンが入水してくるのを確認すると、接近して撮影を始めることができる。これまで海の中で見たことない形状の巨体が、いきなり現れたのだから、最初はたじろぐ。それでもみんなは、まるで磁石に吸い寄せられるクリップのようにラジャンの周りに集まり、その泳ぎに夢中になる。

正直、初めて見た「泳ぐゾウ」は、サーカスのパロディーショーを見ているような不思議な感覚にとらわれた。

ラジャンが海の中にいる時間は、トータルで20分くらい。その日の彼の気持ちにもよるが、想像以上に泳いでくれたように思う。また、あまりに泳ぐ時間が短かった場合は、ゾウ使いが再度、ラジャンさんを水中に連れて戻してくれる。とにかく面白い体験だった。

ラジャンとダイバーの海中風景。これまで見たことのない、どこか可笑しい景観





ソフトコーラルが付着する根の回りを覆い尽くすように泳ぐ、キンギョハナダイ



根の下にはムスジコショウダイがコロニーを作っていた

クルーズ船、パヌニー号の出港地となるポートブレアから、南へ約70kmのところにある、パッセージ島の沖合いにあるポイントが「フィッシュロック (Fish Rock)」だ。岩礁の潮上には、クマザサハナムロやイエローバックフュージュラーの群れに、大型のロウニンアジ、カスマアジが猛然とアタックをかける。

岩礁のスロープには、カラフルなソフトコーラルが群生していて、その上を無数のキンギョハナダイが乱舞し、ところどころにヨスジフエダイやムスジコショウダイたちが黄色いコロニーを形成している。

流れの下手に周りこむと、カラフルなソフトコーラルが姿を消し、岩肌の露出したゴロタと、滑らかで巨大な岩肌を見せるエリア、それを覆うように、大粒の砂でできたフラットなエリアが広がる。ゴロタには、やはり多くのキンギョハナダイが群がっていた。しかし、極めつけなのは、水深20mほどから、緩やかな傾斜を見せ

る砂地にそこかしこに、オキナワサンゴアマダイと思われる魚たちが無数に生息していたことだ。

この深度で、この魚がこれだけのコロニーを形成しているのも、他では見られない光景だった。同じ種類の魚でも、海が違つと、まったく違った生息環境を形成している。そういうことが発見できるのも、新たな海へ潜る楽しみの一つでもある。

カラフルなソフトコーラルとハナダイの乱舞



01/潮上で爆発する、クマザサハナムロの群れ

02/根を覆い尽くすヨスジフエダイの群れ

01

02





バナニー号のオーナー、ジャクリーン氏。バレン島の火山をバックに



01



02



03



黒砂の上に林立する、ガーデンエール。ポディーも黒い

今 回乗船したバナニー号のオーナーであり、水中写真家でもある、ジャクリーン氏の話では、活火山でもあるバレン島の周囲では、マンタとの遭遇の可能性があったということだった。すでに、この島に来る前のナルコンダム島では、数回マンタに遭遇していた。しかし、氏が言うには、「前回のクルーズでは、バレン島で8匹のマンタを一度に見た」ということだったので、さらなる期待を持って、望んだ。

し かし、である。僕が乗船したクルーズの多くのゲストが、黒砂のポイントよりも、白砂のポイントを好

み、本当はバレン島2日目にマンタが沢山見れたポイントを潜る予定だったのに、多数決の結果、別のポイントへ移動することになってしまった。

僕 は透明度の高い黒砂の海をかなり気に入っていたので、後ろ髪引かれる思いだったが、多数決なら致し方ない。しかし、初日にも黒砂の上を悠然と泳ぐマンタには遭遇していた。それが、この写真。そのほかにも、黒砂の上を埋め尽くすように乱立する、ガーデンエールも気になる生物のひとつだった。



黒砂の上を悠然と泳ぐ、マンタ

1ダイブで 8匹のマンタと遭遇

01/Two Spot Antias
02/Pennant wrass
03/捕食中のイエローバックフェージュラー



活火山の海で カラフルなお魚たちと戯れる!



カスマアジに追われて、
海中を逃げ惑う



バレン島の噴煙は、朝
夕が見物。活火山の
力強さを実感すること
ができる

バレン島は、出港先のポートブレアから約10時間北上したところにある。バレン島は、活火山の島で、現在でも島の中央から出る噴煙を見ることができる。

1本目に潜ったポイントはBARREN BAY。青く透き通った海と黒い溶岩流の砂地が印象的なポイント。その青と黒の2色の世界に、黄色いカイメンが点在し、他の海では見られない景観を作り出す。海底にはヨスジフエダイが群れ、ナポレオン、ポテコッド、ヤッコエイなども現れる。小さな根には、カシワハナダイやキンギョハナダイが群れ、カラフルな雰囲気もある。

経験本数の豊富なある女性ゲストから、「こんな雰囲気のポイントはない。この海は象さんだけでないのがわかった!」と、このポイントの評価は高かった。そして、バレン島周辺のまだ名前のないポイントでも潜ったが、カスマアジの群れが、小魚に集団で襲い掛かるシーンなども見られた。時折、潮の流れの早いスリリングなポイントもあった。



01/シロガヤの群れとカンワハナダイの群れ

02/ヨスジフエダイの群れを撮影するゲストダイバー

03/安全停止のとき、みんなで集まって記念撮影!





見渡す限りコウリンハナダイの群れ。こんな景観をこれまでに見たことがない

「BARREN WALL」は、水深10mの棚から垂直に落ち込むドロップオフがオーロラのように沖に続く。そのドロップの深場にちょっとしたダイバー憧れの魚がいる。それは「Twospot Anthias」と呼ばれる美しいハナダイの一種。少し青みがかった赤いボディが印象的で、まるで小さな宝石のようにほの暗い海底で弾けている。水深はちょっと深く35m。そして、少し水深を上げると、水深20m辺りでアケボノハゼを見つけることができた。これは観察し易い。

そして午後、「BARREN WALL」に隣接したポイントで、再度潜ったとき、驚くべき光景に出会った。それはコ

ウリンハナダイと呼ばれる通常はいつも深場にいるハナダイの一種に出会うことができたのだ。それも単体ではなく、群れ、群れ! 群れ!! のすごい状態だった。黒い溶岩流の上、水深9m ~ 30mほどまで、見渡す限りコウリンハナダイの群れなのだ。こんなポイント見たことがない。摩訶不思議な世界に陶酔した。

- 01/ 憧れのハナダイ、「Twospot Anthias」に出会えた
- 02/ 「Twospot Anthias」のメスもやはり美しい
- 03/ コウリンハナダイのメス
- 04/ コウリンハナダイのメスの群れ
- 05/ コウリンハナダイのオス、紅色の天使の輪が目印
- 06/ 黒砂の環境では、カシワハナダイも体色が濃い

バレン島で会える 宝石のハナダイたち!



01



02



03



04



05



06



この噴煙の島の周りに、ハナダイたちのパラダイスの海が広がっている



アンダマン諸島の 魅力的な マクロの世界



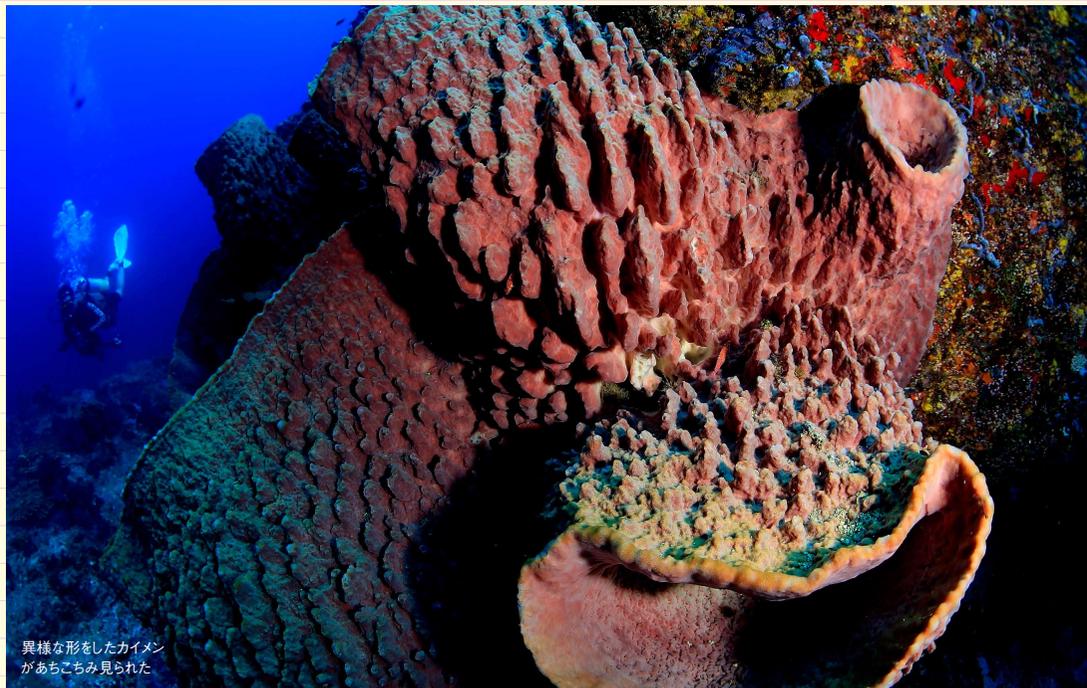
黄色いカイメンの上にいるひょうきんな顔のルボックスプレニー

今回、アンダマン諸島で撮影する機会を得て、「面白いな」と思ったことがいくつかあった。それは赤いカイメンが岩肌に大胆に付着していたこと。その大胆な色使いはインドにある寺院の色彩を思い出させてくれる。

カメラ派ダイバーは、すでに用意されたド派手なキャンパスの上に、お魚を入れて絵作りを楽しむことができる。正直、あまりダイバーが訪れない海で、未知なる種類との遭遇も期待したが、思いの外、それほど珍しい種類を見つけることができなかった。きっと、もっと潜る込んでみると、色々な発見があるはずだが、今回はその時間がなかった。しかし、フォトジェニックな海中スタジオで、賑やかな絵作りを楽しむことができた。

- 01/海の曼荼羅。赤いカイメンが岩肌を彩る
- 02/2匹のヒメゴンベが赤いカイメンの上にいる
- 03/月面のようなカイメンの上でタテジマヘビギンボを見つけた
- 04/体色の濃いアケボノハゼ。撮影のし甲斐がある
- 05/かわいいモザイクウミウシを発見
- 06/シックなカイメンの上にいるタテジマヘビギンボ
- 07/海藻の上に佇むルボックスプレニー
- 08/カラフルな岩の隙間でこちらを伺うキンギョハナダイ





異様な形をしたカイメン
があちこち見られた



サンゴを覆い尽くすように
群れていたキンギョ
ハナダイ

≡ ネルバリッジから、船で11時間移動した、ナルコンダム島。ここも、フィッシュロック同様に、無数のハナダイが多く、根を覆い尽くしていた。しかし、岩礁地帯だけでなく、サンゴ礁の成長も見られ、黒砂の広がる海中景観は、少し異様な印象だった。

ここは、以前ジンベエザメも目撃されたことがある。しかし、今回はマンタとの遭遇に留まった。自分が見たのは、3個体。しかし、4チームに別れたダイバーたちのほ

とんどが、他にもマンタをの遭遇を果たしていたというから、状況によっては、かなり頻繁に目撃できる場所なのかもしれない。

ネットで調べた情報には、マクロも充実していると記載されているが、正直、1～2本のダイビングで、マクロを十分に見つけられる程、潜り込むことはできなかった。

ナルコンダム島で 異世界を体験

01/ハナヒゲウツボの幼魚
02/ここでもマンタに遭遇
03/メギスの一種





根を覆い尽くす、コロダイの群れ。ミネルバリッジの魚影の濃さに圧倒された



©WEB-LUE ウェブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

ゾウと一緒に泳げる海

[バヌーヨーットで行くインド、アンダマン・ニコバル諸島 クルーズ編]

Web-lue 2010. Summer



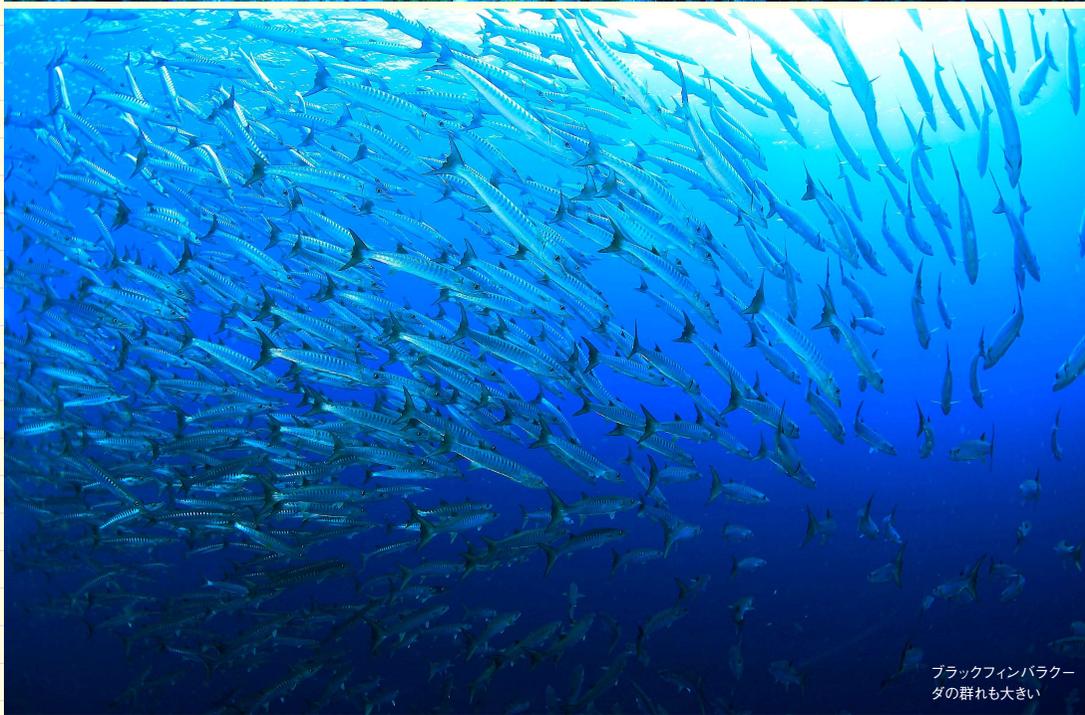
Information Link

<http://www.wfp.co.jp/area/andaman>

http://www.edivekaolak.com/cru_andaman.html

← 関連情報HPへ

他ではなかなか近寄れないヒメフェダイの群れ



ブラックフィンバラクーダの群れも大きい

今回のクルーズで、また潜ってみたいと、特に心に印象付けられたポイントが、バレン島と、このMinerva Ledgeだった。ミネルバリッジは、周囲に島影の無い外洋に、ぼつんとある隠れ根。フラットなボトムは約26m、そのボトムに緩やかな広々としたフラットな台地が広がっているような地形で、そのトップは17m程度。

僕らが最初に潜った時は、透明度は30mオーバーで、他のどのポイントよりも、海が青く美しかった。エントリー直後は、何も無い広々とした根に見えたのだけど、潜行し、根のトップに到着したとたん、どこからともなく、魚たちがわらわらと姿を現し始めた。いや、最初からそこにいたはずなのだが、上からでは、気がつかなかっただけだったのだ。広々としていて、どこにターゲットを絞ったらいいかわからなかったのと、カレントの後からエントリーしたためだった。

エントリーと同時に、流れの上に向かって移動して着

底した場所は、“フィッシュスープ”のように、様々な魚の無れがわらわらと視界に飛び込んできた。中層には、ギンガメアジ、バラクーダ、ロウニンアジ、カスミアジの群れ。根の周囲には、コロダイ、ヨコシマクロダイ、オキフェダイ、ヒメフェダイ、バラフェダイ、アジアコショウダイ、ヨスジフェダイなどのスナッパー系がこれでもかというくらいに群れていた。しかも、普段はあまり近寄り辛い魚たちが、結構近くまで接近できて、僕は撮影のために、何度もこの群れの中にカメラを構えて突入を繰り返した。

群れ系が多すぎて、落ち着いてマクロを探す余裕が無かったけど、ボトムの砂地には、メタリックジュリンプゴビーなどが生息していたらしい。根の周囲では、バンドウイルカの群れにも遭遇した。“魚群”というテーマでは、今回一番のポイントだった。



01/ロウニンアジのサイズもかなりでかい



02/突如、ムレハタタテダイが群がってきた

魚群に囲まれる 透明度抜群の隠れ根



パヌニーヨットは、ダイビングクルーズ船のなかでも、トップクラスの快適度を誇る。水中写真愛好家であるタイ人オーナー、ジャクリン氏のこだわりやアイデアが随所に見られ、かなり贅沢な空間が確保されている。

みんなが集まるリビングは、大きな窓があり、朝～夕の時の流れを差し込む太陽光で知ることができる。スイートルーム、デラックスルーム、スタジオルームの3つのカテゴリーがある客室も清潔感があり、素敵な装い。全室エアコン付きでとても快適だが、ゲストの多くは、リビングの居心地が良いのか(?)、ダイビングの合間は、ソファに座ってみんなと談笑したり、お昼寝を楽しむゲストも多い。

広いダイビングデッキも使い勝手が良く、取材時は、20名ものゲストが参加していたが、グループを分けることでスムーズにダイビングを楽しむことができた。

楽しみのひとつである食事。毎回ビュッフェ方式で、タイ料理と洋食がメインとなる。味は日本人の好みに

とても合い、ダイビングと同じくらい、毎日の食事は楽しかった。

パヌニーヨットは、WEB-LUE記事「デワラン・サンガラキクルーズ」の記事で紹介されているので、参考にしたい。

▶ http://www.web-lue.com/magazine/categorise/derawansangaraki/derawan_sangalaki.html

01/喫煙可能なサンデッキで、今後の打ち合わせ

02/パヌニーヨット号の全景

03/ディンギーへの移動がし易いダイブデッキ

04/食事はbuffeスタイル



パヌニーヨットの快適クルーズ



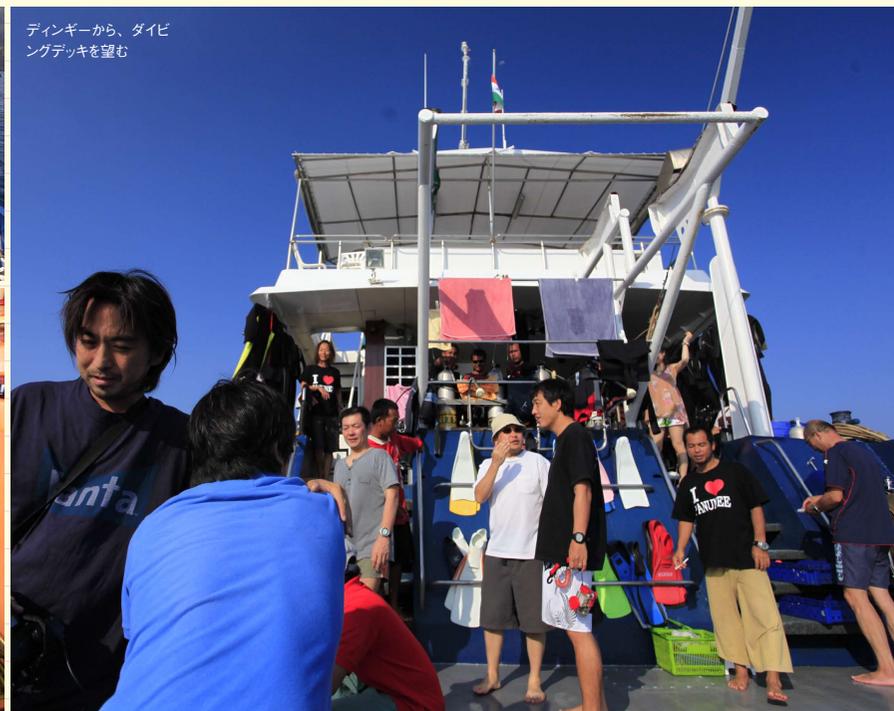
ダイビングの合間はリビングでお昼寝。これがまた心地よい



03



04



ディンギーから、ダイビングデッキを望む



天空にそびえる極彩色のゴープラムは圧巻。ヒンデュー教の寺院で異文化を体感する



クルーズを下船後、チェンナイの見学ツアー（約半日）が催行される。チェンナイはインド5番目の大都市で「南インドの玄関口」とも呼ばれている都市。市内外には、ヒンデュー教の寺院がたくさんあり、今回、訪問したのは、シヴァ神を祭るドラヴィダ様式のカーパーレーシュワラ寺院。この寺院の前には大きな浄めの池があり、雨季になると沐浴が見られるそう。

注目は、境内にある高さ40m近いゴープラム（塔門）。極彩色に彩られた無数の神々の彫刻で彩られている。その他にもポートブレアの看板建物になっているアンダマン刑務所や国立博物館、またショッピングモールでの買い物などもできます。ゾウと一緒に泳いだ後は、ほんの少しだけですが、魅惑のインドを知ることができる。

- 01/ チェンナイの国立博物館
- 02/ チェンナイから、キングフィッシャー航空でポートブレアに到着
- 03/ ポートブレアの空港からは、バスで港まで移動。その間にちょっとした観光も
- 04/ 戦争時の日本人との歴史を
- 05/ チェンナイの海岸
- 06/ アンダマン刑務所内で記念撮影
- 07/ 「リキシャ」と呼ばれる小型のタクシーが町中を行き来する

インド・チェンナイの見学ツアー

ゾウと一緒に泳げる海

[バヌーニョットで行くインド、アンダマン・ニコバル諸島クルーズ編]

Web-lue 2010. Summer



©WEB-LUE ウェブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます



Information Link
<http://www.wfp.co.jp/area/andaman>
http://www.edivekhaolak.com/cru_andaman.html

← 関連情報HPへ



豊崎 晋二郎さん (経験本数324本)

「ミネルバリッジ」1本目が透明度も高く、魚影も濃くて、興奮状態で潜ってました。パレン島の黒砂、溶岩の海がとても印象的でした。初めてのところだったから、どこも楽しく潜れた。来年あったら、また来たいです。

山下 美希さん (経験本数430本)

今回のダイビングは、エレファントメインで来ました。インドという国の、あまり人が潜っていない海でダイビングする事に価値があると思った。魚影の濃さと、サンゴの美しさがあって、本来の海の魅力を感じられた気がした。やっぱり象が良かったです。マンタも4回見れました。

今回のクルーズはどうでした？

今回、edive主催のアンダマン諸島クルーズのゲストから、クルーズ&エレファントスイムの感想を伺った。

ゲストボイス



井上 貴美子さん (経験本数1500本)

手付かずの海って感じ。ゴミがまったく無い海は初めてでした。素敵なハナダイたちと、象と泳げて幸せでした。でも、移動中のトラブルも多くて、インドはもういいかなって気も……。船は良かったですけどね。

佐藤 鈴子さん (経験本数457本)

とにかく、象は良かったです。期待していた、変わった大物は出なかったけど、ハナダイは本当に綺麗でした。もっと、違うポイントに沢山潜りたかったです。

田中 美絵さん (経験本数500本ちょっと)

象は楽しかったけど、もう少し自然な状態で象が入ってくるのかと思っていました。妄想と現実のギャップが多かったですね。ポイント的にもっと確立しているのかと思っていた。魚はじっくり、のんびり見れました。

芹生 輝子さん (経験本数382本)

「ミネルバリッジ」が、良かったです。ここまで来るのは大変だったけど、また来たいです。ラジャンさんには、もっともっと長生きして頑張ってくださいですね。頑張ってる姿が素敵でした。マンタも近くで見れたから良かったです。





伊藤 力男さん (経験本数920本)

初めての場所とはいえ、ガイドさんはもっと事前の勉強をしておいて欲しかったな。船の中の喫煙場所をもう少しどうにかしてほしい。バショウカジキが見れたことと、思ったより透明度が高かったのが、良かった。

小沼 昭彦さん (経験本数450本)

未開の海ということで、マクロ期待してなくて、マクロレンズ持って来なかったことを後悔しました。ポイントによっては、濁ったりしてたけど、「ミネルバリッジ」は最高でした。あと、もう少しレアモノがいたら、もっと楽しめたかな。また来たいです。

竹見 綾さん (経験本数325本)

3年越し、念願のエレファントダイブ、水中で象と会えて幸せでした。でも、もっと一緒に泳ぎたかったです。

酒井 由紀代さん (経験本数1000本以上)

エレファントスイムができて、超ハッピーでした。できれば1本1本をもっと長く潜りたかったです。でも、放置されていたから、撮影に集中できて、最高でした。次回もこれれば60ミリマクロ持ってきたいです。



青木 治彦さん (経験本数560本)

透明度の良い、黒砂の上で乱立する、ガーデンイールの姿が印象的であり、感動的でもありました。ラジャンさんの頑張りにより、エレファントダイブも理想的に終了して、トータルとしては、楽しいクルーズとなりました。

宮下 洋平さん (経験本数400本)

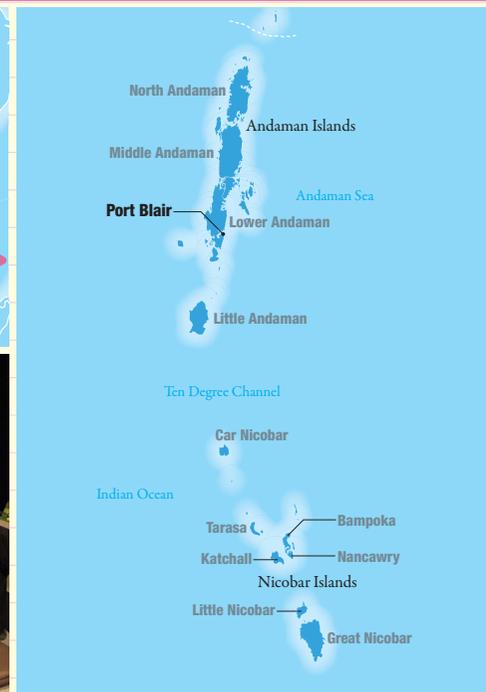
象の撮影がメインの目的だったので、最高のトリップになった。手付かずの海で潜れて、わくわくの毎日でした。ハナダイ系の群れがすごい。ワイドからマクロまで、楽しむことができた。もう少し、1箇所のポイントを潜り込みたい。これからが楽しみな海。

青木 滋実さん (経験本数800本)

一番記憶に残ったのは、火山島。コウリンハナダイが浅場で見れたのが印象的。海面が温泉になっている場所があり、魚がまったくいなくなっていたこと。「ミネルバリッジ」の魚影の濃さも良かった。象のラジャンさんが自分と同じ歳だと聞いて、「大変だな」と思いました。

今回のクルーズはどうでした? ゲストボイス





象も良かったけど、何が一番面白かったかと言うと、やはりtwo spot antiasなど、この海でしか見れない生物を自分で見つけたことと、同じレアモノでも、海が違くと、こんなに生息環境が違うのかというのをまざまざと見せ付けられたことだ。「Fish Rock」というポイントでは、オキナワサンゴアマダイのコロニーが水深20mから広大なエリアに広がっていて、はいて捨てるほどいた。バレン島では、水深10m (!) からアケボノハゼの生息を確認できたし、なんとと言っても、コウリンハナダイが群れ泳ぐのが水深15mって何!? 何でこんなに浅いの? という驚き。しかも、僕は別ポイントに潜っていたので、撮影できなかったという無念さも残り、超後ろ髪引かれる思いで帰国した。

と探してみたいと思っている。
「海中を泳ぐ象」とのダイビングが楽しめるダイビングクルーズが2011年もチャーターベースで開催される。チャーターを行うのは、日本人ダイバーには未知数の数々の未開拓なダイビングクルーズを紹介し続けているワールドツアープランナーズ。それに、タイのカオラックにある人気日本人ダイビングサービスのedive。近年はシミラン諸島クルーズのオフシーズンに、積極的に海外でのダイビングクルーズを開催している。

それぞれ、チャータースケジュールが違うので、都合のよいスケジュールでの参加を検討してみてくださいだろうか。(越智)

だから、次回のクルーズでは、絶対にこの魚を撮影したいと思ってるし、新たに別の生物をもっともっ

「海中を泳ぐ象」ダイビングクルーズ

●クルーズ期間>>6泊7日(日本発着9日間)

edives 主催クルーズ

●2011年3月21日(月) 出発～3月29日(火) 日本帰国

詳しい情報はこちらを参照ください。

☞ http://www.edivekhaolak.com/cru_andaman.html

ワールドツアープランナーズ主催クルーズ

●2011年4月11日(金) 出発 / 7日間(前半航海)

●2011年4月15日(金) 出発 / 7日間(後半航海)

●2011年4月11日出発の前後後半2航海乗船も可能。

詳しい情報はこちらを参照ください。

☞ <http://www.wtp.co.jp/area/andaman/index.html>

パヌニー号

使用するダイビングボートは、全長32m、幅7mのパヌニー号。スイート2部屋、デラックスルーム7部屋のほかに、フォト派・ビデオ派ダイバーのために用意された、スタジオルーム2部屋がある。全室エアコン完備。



クルーズインフォメーション

ゾウと一緒に泳げる海

[パヌニーヨットで行くインド、アンダマン・ニコバル諸島クルーズ編]

Web-lue 2010. Summer



Information Link

<http://www.wtp.co.jp/area/andaman>

http://www.edivekhaolak.com/cru_andaman.html

☞ 関連情報HPへ